

純輸入に転じた中国のトウモロコシと世界市場への影響 ——工業用が押し上げる需要——

主任研究員 阮蔚 (Ruan Wei)

1 純輸入国に転落した2010年

中国のトウモロコシ輸入が世界の穀物市場を揺さぶっている。2010年に中国のトウモロコシ輸入量は157万トン(純輸入量は145万トン)となったが、これほどの規模の純輸入は96年以来のことだったからである。

中国はコメ、小麦、トウモロコシの基礎穀物3種について95%の自給を維持することを食糧安全保障の基本線としている。逆にそれ以外的大豆などは大きく輸入に依存している。中国の昨年的大豆輸入量は5,480万トンであり、国内生産量を数倍上回るとともに、世界の大豆貿易量の約6割を中国一国が輸入したことになる。つまり、中国は大豆の自給を放棄し、基礎穀物3種の95%自給維持に集中する選択をしたのである。

しかし、ここにきてトウモロコシ需給に異変が起こりつつある。97~09年の13年間に中国は純輸出を維持していたが、その純輸出货量は次第に減少し、10年にはついに純輸入国に転落した。これによって、中国がこれから恒常的なトウモロコシ純輸入国となり、大豆と同様にトウモロコシの輸入量も急増するのか、世界が懸念している。中国国内にも「穀物95%自給」という“防衛線”が崩れていくのではないかと不安が台頭している。

世界が懸念しているのは、中国の需要量が大きいため、その需要量の数%程度の輸入でも世界の穀物市場に大きな影響を与えかねないからである。たとえば、11年6月30日、米国農務省が、今秋の米国のトウモロコシが豊作になるとの予測を発表すると、トウモロコシ価格が急落したが、その後中国から約50万トンのトウモロコシ輸入の成約があったとの

うわさが流れると、一転して上昇した。

一方、中国政府もトウモロコシの輸入急増を懸念し、歯止めをかけようとしている。需給逼迫を解消するために一定の輸入はやむを得ないものの、輸入が急増し国内価格が下落すれば、トウモロコシ生産農家の増産意欲が低下し、国内生産がさらに減少し、輸入がさらに増加するという「負の循環」に陥りかねないからである。中国ではトウモロコシ生産農家の数は大豆生産農家の数を大幅に上回っている。トウモロコシ農家の所得低下は、政府への不満など政治的リスクを伴うだけに政府は慎重に対応せざるをえない。

2 旺盛なトウモロコシ需要

基礎穀物3種のなかでは、トウモロコシが90年代以降一貫して、単収と生産量の伸びが最も高く、主食となるコメと小麦よりも増産が進んだ。

USDAによると、09/10年度の中国のトウモロコシ生産量は1.58億トンで、米国に次ぐ世界第2位の地位を維持している。問題は中国の経済発展と所得上昇により、近年、豚を中心とする家畜用の飼料需要と澱粉やアルコールなどの工業需要の伸びが高まり、需給が逼迫してきたことである。

USDAによると、09/10年度の中国のトウモロコシ飼料需要は1.12億トンにのぼり、依然として最大の用途であるが、工業需要も4,700万トンに増大している。工業用需要は、清涼飲料やビールに添加されるコーンスターチ、アルコールなどが急増しており、10年は前年比で57.2%もの急増となった。飼料用も16.7%増と高い伸びだが、工業用の需要増が目立つ

ている。

これにより、トウモロコシ消費に占める工業需要は00/01年度の23.5%から09/10年度には29.6%へと上昇した。中国では、家畜と工業がトウモロコシを奪い合う状況が起きているのだ。

3 工業需要の増大を懸命に抑える中国政府

畜産・工業需要間の争奪が原因となって、10年からトウモロコシ価格が高騰、これが飼料価格の高騰の原因の一つとなり、豚肉価格が10年下期から急騰した。中国の食卓に大きなウェイトを占める豚肉価格の高騰は消費者物価指数(CPI)を押し上げ、11年7月には前年同月比6.5%の上昇と3年ぶりの高い水準となった。

10年に中国はトウモロコシそのものを輸入しただけではなく、エタノール生産用に使ったトウモロコシの絞り粕であるDDGSを約316万トンも米国などから輸入し、飼料原料にした。それでも価格上昇を抑えられなかったため、中国政府は工業需要をトウモロコシ消費の26%以下に抑えるよう指示している。トウモロコシを原料とするエタノールの生産を制限する措置は08年にすでに実施したが、10年にさらに澱粉やアルコールなどトウモロコシ加工品の輸出還付税の引下げや廃止などで、輸出を抑え、工業需要の圧縮に全力をあげている。

4 輸入量の増加と高い自給率の維持

そうした工業需要を抑える措置がある程度効果を発揮し、11年に入って、トウモロコシ価格の上昇は一服している。ただ、中国経済の成長に伴って、飼料需要も工業需要も増加を続けるのは確実である。USDAの予測では、20年に中国のトウモロコシ需要は約2億トンに達し、現在より約4,600万トン増える。

需給逼迫によってトウモロコシ価格の上昇

が起されば、農家の増産意欲は刺激される。政府の生産支援策の強化などもあって、中国のトウモロコシ生産は今後も増大するだろう。ただし、制約要因も多いため、増産のスピードは需要増加に追い付かない可能性が高く、不足分は輸入に頼らざるを得ない。

問題はトウモロコシも大豆のように輸入量が一直線に急増し、自給率が急低下しないか、ということだ。結論的に言えば、中国のトウモロコシ輸入は中長期的に緩やかに増加していくものの、同時に自給率は高い水準で維持できるだろう。上述したように、トウモロコシ生産農家の数はまだ多く、政府が適切な増産刺激策をとれば、増産は十分に可能だからである。

仮に、20年に中国が1,000万トンのトウモロコシを輸入したとしても、トウモロコシ総消費量の5%にすぎず、自給率は依然として95%もある。UADAの予測では、中国の20年のトウモロコシ輸入量は800万トンである。日本は毎年、コンスタントに約1,600万トンのトウモロコシを輸入しており、中国の将来の輸入量よりはるかに多い。

トウモロコシの世界貿易量は現在約9,300万トンであり、20/21年度になると、1億1,320万トンまで増大するとUSDAは予測している。その時点で、中国の輸入量が1,000万トンになったとしても、世界貿易量の8.8%にすぎない。影響は限定的であろう。さらに中国の輸入が日本のように安定的かつ継続的になれば、農家や市場は中国の輸入を織り込み、世界のトウモロコシ価格をかく乱するようなことにならないだろう。中国の輸入で、トウモロコシ価格が下支えされれば、米国やブラジル、アルゼンチンなどの農家のトウモロコシ増産のインセンティブは高くなり、世界の貿易量も拡大していく可能性がある。

(ルアン ウエイ)